



Title	儒教と二十一世紀と
Author(s)	陳, 舜臣
Citation	中国研究集刊. 1994, 15, p. 23-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61158
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

儒教と二十一世紀と

陳 舜 臣

プロフィール

陳舜臣 作家。歴史家。一九二四(大正十三)年、神戸生まれ。六九年に『青玉獅子香炉』によつて第六十回直木賞をうける。九二年に吉川英治賞、九三年には朝日賞を受賞。日本、中国はもとより沖縄、アジア、シルクロードにいたる幅広くかつ深い学識による叙述は、多くのファンを魅了している。著書は『諸葛孔明』、『実録アヘン戦争』(毎日出版文化賞)、『北京の旅』、『敦煌の旅』(大佛次郎賞)、『太平天国』、『中国の歴史』全十五巻、『儒教三千年』など多数。現在、直木賞、和辻哲郎賞などの選考委員。

現代儒学を、プリンストン大学の余英時教授は、「遊魂」と表現した。肉体をはなれて宙にさまよう魂魄のことである。董仲舒以来、二千年にわたつて、儒学は体制に組みこまれ、さまざまなものを持めこまれてきた。中国社会が西方勢力のインパクトで解体されると、儒学は死体から抛り出された「遊魂」にひどしいという

のである。封建的というタイトルのついたさまざまなもののが、肉体を作つていたが、それが解体されて、儒学はそれらから解放されて自由を獲得したという考え方である。その自由をいかに運用するかということが、私は与えられた「儒教と二十一世紀と」というテーマとほぼ等身大であろう。

まず肉体とともに棄てられたものと、魂魄とともに

宙にさまよつているものとを分類しなければならない。

たとえば、譚嗣同は『仁学』のなかで「三綱五倫」のモラルのうち、朋友を除いて、すべて慘禍烈毒と攻撃している。ほかの君臣、父子、長幼（兄弟）、夫婦のモラルは平等の立場でないからなのだ。それは魂の抜けた死体とともに腐るべきものである。「秩序」は重んずるべきで、魂とともに宙にのぼつてもよいが、「差別」は棄てられるべきである。紙一重にみえる場合もあるので、選別は慎重にすべきで、個々のケースについては、学問的研究を加えなければならない。「伝統」もまた重んずるべきだが、それに名をかりた「こけおどし」は排除しなければならない。相撲の土俵は神聖な場所だから、女が上つてはならぬというのもこけおどしだである。相撲にはもともと土俵はなく、人垣に押し倒した形式だった。けが人が出たり喧嘩になるので、江戸では三十数年興行が禁じられた。なんとか許可をもらおうとして考え出したのが土俵であり、営業のためで、べつに伝統のある神聖なものとはいえない。学問的研究での選別ではおとされる擬似伝統に入るだろう。

伝統もまた陋習と紙一重である。

儒教にまつわるさまざまな形式主義、形骸固執も棄て去るべきものであろう。

では、遊魂の内容となつて宙に舞う物の内容はなにか？ 一九八八年、シンガポールでひらかれた儒教についての国際シンポジウムで、「儒家伝統に内在する資源とその限界」について討論されたが、それが参考になるだろう。

体制に組み入れられる前の儒教がもつていた「批判精神」あるいは「抗議精神」が、重要な資源となるであろう。積極的に政治に参加し、君主に仕えるには、「之を犯せ」と助言した孔子の抗議精神である。そのために、長いあいだ、儒家は反体制とみなされた歴史をもち、「焚書坑儒」の災厄に遭っている。長い体制内暮しで、この精神はいささか衰弱したかに見える。王夫之、黃宗羲、李卓吾、譚嗣同といった人たちは反儒のようにみえるが、体制以前の儒の精神をもつた眞の儒者といえる。彼らは專制に反対する立場をあきらかにした。体制内儒教では考えられないが、董仲舒以前の儒教では、そのほうが当然であつた。儒教に内在

する、すばらしい資源として、抗議、批判の精神を発掘し、運用すべきである。

朱子学の「格物」は儒教を科学に結びつけるのに、重要な手がかりであろう。徹底的に物の理を究めようとする「格物致知」の姿勢は、サイエンスへの道である。

二十一世紀を視座に据えて儒教を考えるとき、私は日本の儒教の歩みをふりかえり、それを参考にするのが最も捷徑ではないかとおもう。なぜなら、日本は儒教を吸収するにあたって、科挙の制度と「文公家礼」とをほとんど採用していなかからである。

儒教の衰弱は、それが受験用の教學になつたことに大きな原因があった。科挙を採り入れなかつた日本は、受験儒教から自由であつたことになる。

「文公家礼」を、ほとんど問題にしなかつたことは、生活のなかに儒教が浸透していなかつたことにほかならないが、一方で儒教的形式主義からも自由であつたことになる。「文公家礼」を中国以上に金科玉条視した韓国が形式主義の重圧に長く苦しんだことを思えば、

マイナスよりもプラスのほうが大きいようにおもわれる。

日本が受験儒教の弊害から免れたことは、学問の自由という点できわめて有利となり、多面的な研究が可能となり、儒教を通して、より広い世界をみることができたのではないか。古学派、折衷学派、考証学派、陽明学派、懷德堂学派など、多くの選択肢をもちえたといえよう。

二十一世紀の儒学は、おそらく「儒」という枠をはずして、もつと広い世界に、自由な思考をむけることになるであろう。それは新しいシノロージーとして、そこから儒教をふりかえる姿勢になるような気がする。とすれば、それはもはや「儒」ではなくなつているという見方もあるだろう。儒の定義はまちまちなので、一概にはいえないが、棄て去られなかつたのは、必須の骨格であり、ほかの思想や宗教と共通する面が多いはずである。それに「儒」ということばを冠して呼ぶことはないかもしない。